

第一回大会の印象と 若干の希望

山本 登

1. 第一回の大会に出て、「村研」の一審の長所（諸関係科学の協同）が、はつきりとでたことが最も印象的。併し他面において、ついうかうかと報告する気持ちになつて了つたために、心理的に消極的になつてしまいました。共同報告をした西田君の如き、冷汗でびつしより、社会学での報告は「こわくなかつた」(?)が「村研」は「こわかつた」(?)という実感です。だが勉強になりました。
2. 大会の持ち方としては、総会でも意見が出た如く、報告者の教をへらすこと。それにつけても報告者はやはり、もう少し時間の責任をもつことが必要。協同の困難の面がはからずも、討論で出た形。これはやはり運営技術と報告者の責任だと思ひます。
3. 宿題。二つの意見が同教といふことは、やはり向題としては本荘通りがよいとい

ふことかと思ひます。但し大会、研究会において、ぐつとしばればよい。時間には限度があるから。

4. 何はともあれ一番うれしかったことは、informalな(casual)上下関係の欠如していること。「村研」の発展の将来は思ふべし。来年の懇親会は、どこかでアケラをかりて、大いに談じたい気持ちです。少々高くついても、みんな喜んで出すであらう。

5. 向題点：Case StudyとMeasurementとをいかにして調和させてゆくか。各地方村落の比較という場合、どこに共通の次元をみつけるか。第一回の報告に関する限り、「各々我が道を行く」感じ。「村研」とつての今後の向題点ではないであらうか。

6. 運営。有賀・中村・森岡諸先生のチーム・ワークまことに見事。お気の毒とは存じますが、少くともいま一年、お世話を御願致したいと存じます。

7. 安い会費に充分に飲まして頂きました。東北大学の諸先生の御努力に感謝の言葉もありません。「仙台！ 仙台！ なつかしや」(仙台小唄の一節)
思ひつくままに。(一九五三・二・二〇)

(大阪市大)

